



Handwritten Japanese characters on the cover, likely the title or author's name, including characters like 天, 地, 人, and 神.

中村俊定文庫
文庫 18
1018
5





神中抄第三

まひなう
と祢と又
うまらうら
かそら乃小野
り月まこの池
さやね
きさす
ねさうら丸月乃みまら
ん月さあしん

ひささの
わさかとうらうら
きさこのさうら
んさうらうら
ま乃ひさ
ささうら
ひささ
らんの船さうらうら

神中三ノ目録



よひが

まづこれの遊をよまむとて終つたぬ

花まひあふよそはあつたまはるる

頭胎まひあふとて敬中とてあひあひ

万葉の清らむとていかに清らむとて

まひなむとていかにまひなむとて

とていかに 万葉

あつたまはるるまはるるまはるる

あつたまはるるまはるるまはるる

あつたまはるるまはるるまはるる



杉の木の皮を削りてその皮を細く切ると

ひしひしと音がする神を祀るに

頭取の伴物^{ついで}は鹿尾菜^{かごけ}の葉を煮て

その汁を飲むと神を祀るに

中よひの物よき物といふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

倍よき物といふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

物よき物といふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

中よひの物よき物といふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

倍よき物といふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

物よき物といふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

いふにや〜 又いふにや〜 下は倍よき物と云ふ海藻
あつたにや〜 煮たり〜 鹿尾菜^{かごけ}の葉
昔に申すに〜 鹿尾菜^{かごけ}の葉
うきうきと云ふにや〜 鹿尾菜^{かごけ}の葉
その物よき物と云ふ鹿尾菜^{かごけ}の葉
ひしひしと音する鹿尾菜^{かごけ}の葉
その物よき物と云ふ鹿尾菜^{かごけ}の葉
その物よき物と云ふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

唐標^{たから}花と云ふ物にや〜 鹿尾菜^{かごけ}の葉

その物よき物と云ふ鹿尾菜^{かごけ}の葉

顯如云し福と云は乃まにいそ一可葉
家持唐棣花来

交まげく信らる故福受ひさるこの
わつららぬくしうらひあなり

い哥よと信ると點く蓮花とや人信き
と是とひん福とらるや信入るあはれと心
うらひのやとこと信る解やしらとといんか

蓮とのと書くら解也但武可葉書去云

唐棣花ちよとよかしるのむ 江部告えべつ おいさうら

有る傍ある傍 綺袿きこせう 柳かたな 柘榴ちゅうりゅう 菖草あや草

勅和治

いと福すい人志もあつる事也それとはさ草
と云んかあつらふと云らひわと云義あは月
る中と信れらる信し部類く交哥よふぬとて
一首入る今案云庭揚らまはう物あはと
まはひの月あは月七月あはと云と云らり
しきなるまららるひなる乃神あはと云物
よやらる海まらるぬと云信り別物名と云
信る一又可葉十云
山梅とのやつらるるり賀歌と乃
ありとのとらるるあはと云は

なほのうらみとてしるはいとほしくも
あはれなきもいとほしくもあはれなきも
こころをばなすらちのあまもあはれ
わがこころはなすらちのあまもあはれ
よはれとて海を渡るはなすらちのあまも
是もなすらちのあまもあはれとて海を
さすらちのあまもあはれとて海を
うらみとて海を渡るはなすらちのあまも
とて海を渡るはなすらちのあまも
らあはれとて海を渡るはなすらちのあまも

海はなすらちのあまもあはれとて海を
あはれとて海を渡るはなすらちのあまも
乃らあはれとて海を渡るはなすらちのあまも
いそぎとて海を渡るはなすらちのあまも
万葉よ 百合花 贈 宿 密 哥
こころをばなすらちのあまもあはれ
いそぎとて海を渡るはなすらちのあまも
あはれとて海を渡るはなすらちのあまも
乃らあはれとて海を渡るはなすらちのあまも
いそぎとて海を渡るはなすらちのあまも
万葉よ 百合花 贈 宿 密 哥
こころをばなすらちのあまもあはれ
いそぎとて海を渡るはなすらちのあまも
あはれとて海を渡るはなすらちのあまも
乃らあはれとて海を渡るはなすらちのあまも
いそぎとて海を渡るはなすらちのあまも
万葉よ 百合花 贈 宿 密 哥

若くは私如比文者花友開とんえり又
万葉乃河とくく濁るもお後於 又万葉云
あひまふ神も姉もむじうけり
うきうりたるかきうりうりおゆめ
わさうわさう月ひるゆり物とくく
うきうりむ乃ちあくめやも 不知玉
うき洗おと濁もちあくめやと濁も不聞
但 汪尔雅文を擬よ可劫也 私云或人のも
とふう魚くゆい花さひくまふううのせり
こつめはよはくわさ積とうらぬうきんむらび

うき洗おと濁もちあくめやと濁も不聞
但 汪尔雅文を擬よ可劫也 私云或人のも
とふう魚くゆい花さひくまふううのせり
こつめはよはくわさ積とうらぬうきんむらび
あひまふ神も姉もむじうけり
うきうりたるかきうりうりおゆめ
わさうわさう月ひるゆり物とくく
うきうりむ乃ちあくめやも 不知玉
うき洗おと濁もちあくめやと濁も不聞
但 汪尔雅文を擬よ可劫也 私云或人のも
とふう魚くゆい花さひくまふううのせり
こつめはよはくわさ積とうらぬうきんむらび

又此まきくもいふはるい巻ふもえんりつとては
こ乃と中ふさういひといひて人万毎来云

今何くいひうきうもいひうきうき

石流

き海この水とじまひてんうの 橋津作

いさうい乃方と無見ともしら又無水やと

中者あり代無水とちあしとくさうい乃とと漬

てやぬぬ新ともはり 清澄抄云いさうくとい

石乃上よ水乃うらまも海とてあつひといま水

乃水とまをえそ終りういりわさういもえんつ

わう伝云もあつひといま^{あつひのふり}國甲おる郡よあり

取乃名とりまこも取よいあつひさう海もあつひ

もこつわつとやわらんげ伝と可思

岩とくくも岸乃うらまも海をこれ

へあつひよせと終てあつひのあきん

岩とくくも海これ水乃とまきや

こもつとあつひうらまも海をこれ

童童歌云いの上よさうくも水乃取あつひと

もくひもえんせりと傳りり 又無見と中者も海

かわりも海と無見と中者のまうとてい

同弟云いさう海無見あつひもあつひ

あて心ゆよなりりし水乃なりりとらんえよゆりし
とあつらひとらんがひなりりよといふ又よよとて
つとて清也 いぬねたお楽水のよとよゆりぬ
とととくひとよよ楽あといとんととらぬよよと
とらとて秋あつらひのそいれとて又よの國の
とて楽水と不志之ぬ也の櫃の料は清也
くつられ小野

みりし水乃水野とくつられ小野
あつらひとくつられ小野

頭取と精といわくつられと清之ぬらひ清とはわ

さひ乃小野とくつられ小野
いり清なりし水乃水野とくつられ小野
ん乃神あつらひと清也 わつらひとくつられ
なつらひと清也 又長秋
又清也
つられ小野と清也 又長秋
つられ小野と清也 又長秋
つられ小野と清也 又長秋
つられ小野と清也 又長秋

あつたたりぬめび乃事一應考本文下節不
死之傳事也矣也

かひまゝこ乃池

かひまゝこ乃池よさちわのひりりり

よらうに物と移さひまらりり

顯えせう胎云うゆまゝこ乃池といふ皆も他國もまゝこれ

まらちまゝすかつら皮國のゆゆまゝこ乃温の水あり

まぬれ能の因のちの枕のよの下の結のよのもの入の

あり柝の不の重の敷のよの海のさう乃湯のよの下の時

り乃のちの氏のよの釣のゆのかのさの池のありとのりのものゆ

さつこゝる或人ゆさつこゝる池のさあ良あ
京業師ち乃の池のちの傳のさつこゝるの心の不の重の也
乃葉の弄の云

かひまゝこ乃池のまのれのあのらのあのら

あつたたりぬめび乃事一應考本文下節不

者の或の有の因の云の新の回の部の親の王のかの極の給の堵の裏の津の見の

清の回の之の池の感の者の津の心の之の中の還の自の皮の池の不の重の捨の愛の

お時の語の婦の人の云の今の月の極のひの見の縁の回の池の水の歎の瀟のとの葉の

花の灼のこの何の恰の虧の腸の不の可の言の京の亦の乃の婦の人の作の此の戲の言の

専の淑の吟の池の之の云の

をいぬるしむき

しむきつていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

顯昭といふは、大嘗會主基方玉村とて、大嘗會

忠朝臣詠ふやうなむ村とて、大嘗會とて、海の

しむきつていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

ありてききりひらきしむきつていぬるしむき

重感家乃等公めとていぬるしむき

よまぬあつ人乃とていぬるしむき

會とて事小穢翁のむとていぬるしむき

ふきき信井やむ義忠とていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

しむき

しむきつていぬるしむき

しむきつていぬるしむき

吾云く急と義とお遠はひ乃中や大あくとあ甲
とお遠^{さかい}路り如と河とあふ義とお遠らるり山を
いかりとお遠う流う山り十りやとお遠お山り
く流るり下ふひ流く後よ一りく一りあふ
但るり非きるる非ぬひ義秋よあふ山り
きるる非るる^{せう}澄り葉梅弄云

まろゆいさぬういさ行くまろいひめ
後二乃とあを風うららとせぬ

秋乃と非るる流ひ事い流あく康頼入道い
俣^ま非ううひ方よ人とお傳くまの付と顯昭之流

らく五葉云あ入道ららら不知只る非也
と聲^{こゑ}算い中付あらとらと流よる流人くる大
極ぬひま

まろいひめ

れらと非るる流ひ事い流あく康頼入道い
くくくくくく流るる流ひりまらるり非

顯昭云行る非るる流ひ事い流あく康頼入道い
はらららららら

とらと非るる流ひ事い流あく康頼入道い
かり流るる流ひ事い流あく康頼入道い

顯昭云猶親集云祇宮乃九月祭りまゝに
始つる事人をもすそ川は祇宮に海あり
まゝの如き房とまゝに川ありていふ
しとわらば坊々乞ひ分ちていふ
為事や中納言俊忠乃家として
中よあまの事と云ふこと
神風や川ありていふこと
きりんと海と云ふこと
私云或人云伴瓊大神宮より乃拍と云ふ
ことありていふこと

いふやびおろし事と云ふこと
解く神は清く人々懐かき日本紀より清
葉と云ふこと國史より三角拍と書り
今案よるに乃乃同事なること
と云ふこと葉拍と云ふこと
かゝるの船と云ふこと

いふことありていふこと
いふことありていふこと
いふことありていふこと

お持作

三月草萋々黃鸝歌又啼柳橋晴有絲
波路潤無波禊事終初畢遊人到欲齋金
鈿耀桃李絲管駭鳧鸞博岸迴船尾信流
簇馬蹄開於揚子波踏破魏王堤妓接謝公
宴詩陪荀令遊舟同李膺沈醴為穆生
携乃水引春心蕩花牽醉眼迷塵街徒
鼓動烟樹任鴉棲舞急紅霄散鼓歌
逐翠華空恨夜歸何用燭新月風樓西

三月三日

暮春風景初三日

流世光陰半百年

欲作閑遊無好伴

半江惆悵却迴船

一力葉十七大伴池主詩云

柳陌臨江得袈服

桃源通海泛仙舟

雲壘酌桂三法港

羽爵催人九曲流

童蒙按云曲水宴宋書云自魏王後但用三日

不復用也續秋諧記云荀周公卜城洛

邑固流水以汎酒故詩云羽觴酒既又秦昭

王三月上巳置酒河曲金人自漢而出奉水

心鈕云今君別有西夏語乃其處也固立為曲

水二續相治皆為感集云々

曲水よそひくくさうのこたけうすくさび奇を
 海よあつめあそひとと旅り又之舎湯玉の競伽
 河よ二月三日そ水とあそ海乃れりあ〜く
 道遠まねて徳罪を滅と〜り見ん肉典と
 今之事之計今あり

神中抄第廿四終

神中抄第廿四

| | |
|--------|---------|
| さふはらぬ | は乃さふあ |
| あす乃きまね | か海よぬ〜 |
| よりへあ水 | くらゐの海とあ |
| よりあ乃けり | いああそのあ |
| りい屋し海 | あ〜りあ |

やうふほし〜ぬ

散類相さいにつらよひ〜ぬ

ふ乃ら〜ぬ

顕昭云万葉にさふほし〜ぬと讀ら相とよまに
つらぬ讀らぬありふす〜ぬ是をねよ

同らよ

たみ類さよゆい〜ぬ

ちろ目さよえられぬあり〜ぬ

さふらつらと讀らとら〜ぬ

さ〜ぬ義やさび〜ぬ

冊目

さしやうらうらうともしもやうもたれんかひのいもは
くはよや又長款ふいあつる假名よ又文字の
書もゆふありと終しあゆめらうとよまふ事
類いふかたよ又長款よふいほしぬと又文字の書
あつる神とよあつるといほしぬと
と詞同らふとよふとよ換せういたりよふと
ぬる類やとよあつるといほしぬと
いふとよあつるといほしぬと
よふとよあつるといほしぬと
ひよとよあつるといほしぬと

長款云

かひのぬき乃とあつるといほしぬと
まつとあつるといほしぬと
よふとあつるといほしぬと
よふとあつるといほしぬと
よふとあつるといほしぬと

よふとあつるといほしぬと
よふとあつるといほしぬと
よふとあつるといほしぬと
よふとあつるといほしぬと
よふとあつるといほしぬと

と終くさつてぬもさむつらも同く可なり
又万葉云目類布と書り類字を流すと
か然らざる也

流乃と云ふ

流乃 流乃 石村山 流乃 志保を入る

と云ふ流乃 流乃 志保を入る

題詠云流乃字は流乃と云ふと流乃といふ

と云ふ也石見國は流乃と云ふありと云ふ

と云ふ流乃といふと云ふと云ふと云ふと云ふ
流乃也

石見流乃と云ふ流乃と云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

流乃と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

石見のや 流乃 山乃 流乃 流乃

つらぬ神といふと云ふと云ふと云ふ

流乃 流乃 石村 流乃 流乃を流乃

い流乃と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

又云流乃流乃石見之海乃

又云流乃流乃石村通平

又云万葉は流乃と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

續るる次

いすのこけき

玉^こぬれ乃^こ小^こ簾乃^き寸^さ鶴^さ若^さり入^いか^いん

き^き祿^{ろく}も^も地^ちの^の母^はり^り同^{どう}の^の風^{ふう}と^とま^まる^るじ

頸^{けい}胎^{たい}云^いき^きけ^けい^い志^しき^き云^い云^い詞^しの^の百^{ひゃく}葉^{えふ}哥^か云^い

む^むこ^この^の具^ぐき^き我^わき^きき^きら^らま^まれ

い^いま^まい^いち^ちあ^あ海^{うみ}り^りあ^あら^らま^ま

ひ^ひき^きけ^けい^い志^しき^き云^い云^い東^{とう}園^{えん}乃^の風^{ふう}俗^{じやく}の^の詞^し云^い

ん^んえ^えき^きら^ら 倭^わ頼^{らい}壽^{じゆ}云^い

ら^らぬ^ぬき^きと^とあ^あす^す乃^のこ^こけ^けき^き乃^のあ^あえ^えら^らま^ま

三十一

ん^んえ^えき^きら^らま^まい^いち^ちあ^あら^らま^ま

や^や海^{うみ}は^はぬ^ぬの^のあ^あら^らま^ま

あ^あら^らま^まと^とや^や海^{うみ}は^はぬ^ぬの^のあ^あら^らま^ま

ら^らま^まは^は海^{うみ}の^のあ^あら^らま^ま

頸^{けい}胎^{たい}云^いか^かい^いあ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^ま

ら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^ま

あ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^ま

ら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^ま

あ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^ま

ら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^まの^の詞^し云^い云^いあ^あら^らま^ま

まじりあひさり乃実をあらんを母と
顯服入乞の伴物終連歌也との女さう方よ
りしこと魚乃所らふ書り下りの業平の終つ
りまの終つてし書りし終り乃しとれと書
ぬえとのあさる終と書るものさんとし終
と終と終つてし書りし終と假名とあつて
く終と終つてし書の文字なれ終と終つて
つと終と終つてし終つてし終つてし終
あれつと終と終つてし又もあひなんと終つて
終つてし終つてし終つてし終つてし終

けつひの事ありき終つてしやん終つてし連歌と
やぬつりたり終つてし終つてし終つてし
よ終つてし終つてし終つてし終つてし
ひつてし終つてし終つてし終つてし
あつてし終つてし終つてし終つてし
かつてし終つてし終つてし終つてし
えつてし終つてし終つてし終つてし
うつてし終つてし終つてし終つてし
ねつてし終つてし終つてし終つてし
まつてし終つてし終つてし終つてし

のしりしとくしんんぬり但ん後よハ二条后れい
まじ^{いりかみ}始末あしくばりきり可業平中納乃忠の
てかしくしくゆりる紙はせうとの君^{えんちゆうし}を基^き礎^そを
國^{こく}體^{たい}大^{だい}納^{なつ}をさとのまうくばりきん^{きん}の^の事^{こと}を
らん^{らん}く^くの^のへ^へめ^めれ^れく^くの^のま^まり^りん^ん初^{はつ}り^りは^はら^らま^まこ
を^を終^{しゆう}り^り我^{われ}も^もあ^あま^まの^のつ^つわ^わと^とよ^よと^と終^{しゆう}る^るい^いひ^ひの^のま^ま
あへ^へし^し私^{わが}を^をあ^あび^び初^{はつ}を^を業^{わざ}平^{へい}奇^きに^に如^{ごと}く^くま^まう^うの^のま^まの^の
は^はら^らと^と終^{しゆう}る^るい^いひ^ひの^のま^まと^と古^こ今^{いま}よ^よい^いう^うと^と人^{ひと}あ^あら^ら
あ^あと^と事^{こと}を^をり^り男^{おとこ}の^のう^うめ^めあ^ある^るも^も如^{ごと}く^くう^うめ^める^ること^{こと}も^も定^{さだ}
か^かく^く但^{たゞ}後^ご捨^{すて}速^{すみ}同^{どう}答^{たふ}え^えを^を如^{ごと}く^くい^いと^とあ^あら^らく^くと^とこ^こ

ゆりまのつとめく和泉式部の人を許へばうハ
一きり奇

きりもむらもむらもむらもむらもむらも

はらもむらもむらもむらもむらも

経^{きん}信^{しん}の^の同^{どう}き^きを^を如^{ごと}く^くい^いは^はら^らと^と終^{しゆう}て

む^むや^やも^もは^はら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^も

う^うら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^も

た^たら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^もむ^むら^らも^も

物^{もの}と^と通^{つう}信^{しん}の^の言^{ごん}を^をい^いは^はら^らと^と終^{しゆう}て

年^{ねん}を^を知^ちら^らむ^むや^やう^うは^はら^らと^と終^{しゆう}て

ついでに中大子にきんごすりよまのいご徳とあられ
くゆめらぬうへ海くちあがりあそりあつとあそ
ゆり寸気まの事いぬひくゆ 又まらあといひ
男乃河あくくといふ終ゆめ女乃くまららよ男
とまらあといふんせいれゆくとまらあといふ
中女とまといゆれいあし朝若山あしむ乃年あこ
しむゆりまらあ乃ゆりといふ海きくゆりいそ
わめれ又ひあそあ今小旗入るまひふむいそ人あそい
あそく日おひ時とかなはさねくゆめれきよははき
てもまらあ敷乃ゆりくゆり日本紀よすこのとれゆり

ついでに中大子にきんごすりよまのいご徳とあられ
乃字名よ送る事よあひあはし事といゆり
又万葉うへゆつ乃中やまもくもか終くゆり物
かれといふあこつと書と書くゆりといふ婦
とも嫌といひゆりといふい終くゆめれとれ
字書よ毒の義なりといふ八種さう終くゆり
まら終くゆりいひかうらまゆりあまれ字と終
といふあそとあといふ海きゆりぬ物と又あそ
あそくも朝書あそ書といひゆりといふいひ
はくくゆりまらあといふいひい海いあそ

母兄中乃字とをばしとて海にゆくゆらんや
但此の中法乃と云ふゆきを減く男とつて
徳とくゆらんゆきをばしとて海にゆくゆらんや
母もゆきと云く徳をと水とくゆらんやと云
るとはゆきゆきと云く徳をと水とくゆらんや
考万葉松浦佐香姫弄云

と成つ人まつてゆきゆきと云く徳をと水とくゆらんや

いさゆりーと云く徳をと水とくゆらんや

又考よ日本紀云弱草音史河塔今者

和加久依乃阿加津万の也

言弱草者謂古者以弱草きくく喻史婦あきふ故
以弱草為史又万葉歌大橋娘子弄云
若弟之史香良哉云

付之案より弟は史婦のあひがふゆき
こそあはれゆきゆきと云く徳をと水とくゆらんや
母もゆきと云く徳をと水とくゆらんやと云
るとはゆきゆきと云く徳をと水とくゆらんや

又万葉歌よ
ゆきゆきと云く徳をと水とくゆらんや

ゆきゆきと云く徳をと水とくゆらんや

乞ハ草鬢ガ 又ハ世相ニツラシム

うらまへし神ノ御心ニツラシム

人カニツラシム

洞ノ昔男ノ心ニツラシム

トモニツラシム

心ニツラシム

心ニツラシム

ハ吾妹ノ心ニツラシム 又國中ノ

梅葉為妹蓋古之俗年

吾君叔云 申納言 松云 法性ノ入道云

つらぬきいりつら ねあつ那

後重

つらぬきいりつら ねあつ那

と人ノ心ニツラシム

と人ノ心ニツラシム

と人ノ心ニツラシム

と人ノ心ニツラシム

と人ノ心ニツラシム

と人ノ心ニツラシム

と人ノ心ニツラシム

うそをわれまへめよら飛んてびうけんとは
 りたてゆくを物とつりたりやうにさうく書海とて
 ともあそびて伊勢物語と古今と大鏡とに
 お逢ひのあそび可辨歌もや古今よふ入あり
 けいさくもまらなう舞とんえんたりいあそびめ
 て六首より葉集あそび 常言歌集也 伊勢物語
 よ、武藏野と書らるは古今よふまき目野と書ら
 れた國つら後那の如らり舞のうろまかやとれ
 くもたらぬや 今葉集葉集とひらきや
 伊勢物語ふるまらり野のまのむらりま

あらあときあ乃何やとじうり國つらたの
 那みし乃^{さい}葉集とあそびの傳とてはもや
 あらひい^{さい}葉集とあそび今身とた^{さい}葉集と
 あら^{さい}葉集とあそびあそびありぬやらら
 らあそびあり

いろあそびいろ葉集

いろあそびいろ葉集

額取之演成之式之十新意也古事
 此亦是直語或有相對或無相對故曰新意

如孫王^{孫王}燭燒^{燭燒}德哥曰

去月^{去月}とていつりぬる夜乃^{夜乃}多ありト

ヨリヨリひとく好くあつる奥の夜と

六くスミ 各ハハレコクランノ イツクニツルトキハ

數不見^{數不見}譬如湖^{譬如湖}開之^{開之}穢盈時不見^{穢盈時不見}落時^{落時}

逸見^{逸見}故塩^{故塩}為^為喻古雅自故曰^{為喻古雅自故曰}新意見日

夜^夜意^意夜火者是其相對^{夜火者是其相對}是^是躰与古自相

似^似亦難別可以消息^{亦難別可以消息}とく

今付^{今付}は去^去あふく 万葉を月とくとも好くあ

らく乃^乃は月とくありは去^{は月とくありは去}よひつる日とく好く

らく^{らく}は月とくありは去^{は月とくありは去}よひつる日とく好く

あつるよとあつるよとあつるよとあつるよとあつるよと

つひつひつひつひつひつひつひつひつひつひつひつひつ

去^去月^月とていつりぬる夜乃^{夜乃}多ありト

又^又はつるよとあつるよとあつるよとあつるよとあつるよと

見^見るよとあつるよとあつるよとあつるよとあつるよと

とく好くあつるよとあつるよとあつるよとあつるよと

去^去名^名取^取よひあひつるよとあつるよとあつるよと

去^去よとあつるよとあつるよとあつるよとあつるよと

あつるよとあつるよとあつるよとあつるよとあつるよと

まればあつるよとあつるよとあつるよとあつるよと

河屋一巻

河屋一巻志乃水打ち人か原の巻也

いりぬち坊らうらぬりひうらん

顯昭云乞ハ神樂乃禱よ交神あところ申あり

うらまらせくハ神糸る冬と春と交りて

河乃うよさう本とまらふとくはくは

そや一巻之なるも

め水乃うよさう海川屋一巻

河乃うよさう海川屋一巻

又うらうのあまらんとあ忠常一うあま

巻一の段よまらぬ河屋一巻

あまらう神乃あまらうあまら

又志のあまらうとあ志乃あまらうと書らう

あまらう乃作とあまらう乃作とあまらう

あまらうとあ志乃あまらうとあ志乃あまらう

あまらうとあ志乃あまらうとあ志乃あまらう

あまらうとあ志乃あまらうとあ志乃あまらう

あまらうとあ志乃あまらうとあ志乃あまらう

あまらうとあ志乃あまらうとあ志乃あまらう

あまらうとあ志乃あまらうとあ志乃あまらう

りうめそ新くく物らめ毎但新案よ六月後
よも反新案といふ所や江部曾六月盡哥云
何や一海坂らあはうとねも入るや
るも乃く先ゆふ風乃とていふ

又陪後入道重義哥

海屋く海く浪せきいふ家月忠

あら海り新めあ海めらん

い半のね月つらるるのぬぬ之をといふ六月後り反
新案よらんやとさつ新行いとあらんかむと
りふ新めあといふ中後授るといふ事たよ新

二二

休らり事おらるを新し六月後も海原あといふ
まのい使とねやあといふせといふ生忠見の
御屏風よ六月海色よ新案よ海あり海つあ
らぬといふ海をう新くめ水
いといふいといふ新もい海

是の二定反新案乃んるり海

経済扱え海やといふ海乃とよある社と云智
あめ海原社といふ或人云川乃新といふ
又志乃小行わといふすといふ中希るやらわらけ
てりといふ海新といふいといふと海中り

まことの皆ひり事也きいなるれ神宗乃事なり神
宗いなきは宗らん成そのつゝめりあら事やめ
なることば可なりんは神宗なりあはらる
海乃漸より入ま宗宗とらるゝと推少く志の行
とをそれよかゝるゝと神宗神借といふ事あり
海神と云はれんは火おきび海神志乃あはり
とてゝと云ふ事ありけは法及神宗乃譜
ふらんえあり神宗の家よまは事也きい忠家
況也同云及神宗と昔よりつゝそのつゝめり
貴之り集にあり扇風乃流はきよ及神宗と

まはらぬ事なり例り神宗の神代なり事なり
と事はなるのよらりては事なり事なり
物造りては人なりん始ありあはらるゝと神
神宗も昔よりありんこのゝらるゝ人なり
いゝめ事なり事なり人信馬樂乃譜と一條
たはら乃可なりん事なり事なり事なり
神宗も昔よりありん事なり事なり事なり
ひもゝかゝるゝと事なり事なり事なり
事なり事なり事なり事なり事なり事なり
あゝ事なり事なり事なり事なり事なり事なり

いやはこ乃てぬりおとくさくろり飛ん

今まひ舞ひつるはなふじま乃らんと申のえんころり万葉の
ふとお慶めぬらつるも振とぬる物ゆらん物を徳と
可^{まじ}斟酌也 又法補約信じつものそれじま乃義を
いそ物とてしなまこといそ物といふ不精む乃愈乃
うこ物とくらりくわり

過考 音義家抄云云 ことれてぬりての部乃あつまひ
とまことて古人のあつまひとまことて不^{ちか}遠^{くさ}思^{くさ}儀^に欽

